

久留米発祥の伝統工芸 らんたいしっき 籃胎漆器灰皿

会期: 令和8年3月3日(火)～3月31日(火)

久留米市立六ツ門図書館展示コーナー

本資料は、令和6年12月9日付けで本市が寄贈を受けた、久留米籃胎漆器合資会社(久籃社)きゅうらんしゃ製の籃胎漆器灰皿です。籃胎漆器とは、竹で編んだ器などに漆を塗り重ねてつくる工芸品を指します。

灰皿は明治45年(1912)から昭和15年(1940)の間につくられたもので、縦11cm、横15cmと小ぶりながら引出しが付いており、中に煙草などを収納できます。灰受けの部分は金属製で、取り外し可能です。

久籃社(1912～1948)は、籃胎漆器創始者の一人である川崎峰次郎かわさきみねじろうの次男猪次郎の協力により発足しました。昭和54年(1979)、籃胎漆器は福岡県知事指定特産民工芸品となりました。

● 籃胎漆器制作の背景

明和2年(1765)頃、久留米藩は京都の有名な塗物師勝月半兵衛しょうげつはんべゑを招き技術指導を得ました。久留米藩では細工物の制作に力を入れてきたということもあり、藩の漆器は一大特産品となりました。

明治18年(1885)頃、久留米藩御用塗師ごようぬしの流れをくむ川崎峰次郎と、竹細工師たけかごの近藤幸七、茶人の豊福勝次とよふくかつじが共作して、竹籠の漆工芸品を作りました。これが籃胎漆器の起源であると伝わります。その後、峰次郎の長男辰次や次男猪次郎らにより、籃胎漆器製造の基盤がつけられました。なお、「籃胎漆器」の名称での実用化は、明治28年(1895)の第4回国内勸業博覧会のときからです。



籃胎漆器灰皿

籃胎漆器の代表的な編み方である「網代編み」でつくられています。